写真１　天王･船塚11号経塚出土の経筒（正面）

写真２　天王･船塚11号経塚出土の経筒（右側面）

写真３　天王･船塚11号経塚の段築

天王・船塚11号経塚出土の経筒に関する一考察
－『週報』の再評価にむけて－

今　泉　　潔

１．はじめに

昭和40年代の高度経済成長期後半から、大規模開発と埋蔵文化財の調整が大きな問題となってきた。千葉県でも成田国際空港の建設計画が日程に上るようになってくると、空港関連事業としてニュータウン構想がもち上がるようになった。その大規模造成に対応するために、恒常的な組織を編制してはじめて取り組んだのが、成田ニュータウンの発掘調査になる。昭和44（1969）年10月から調査が始まったので、早くも半世紀近くが経とうとしている。

成田ニュータウンの事業面積は500ha近くあり、その中にある多くの遺跡から貴重な調査成果を得ることができた。なかでも北総を代表する龍角寺古墳群と並ぶ公津原古墳群の60基以上の古墳の調査にメスが入り、数少ない埴輪窯の存在まで突き止めることができた。また古代では集落の消長が明らかとなり、出土した墨書土器の内容からは、当時の集落のなかに古来の神祇信仰とともに仏教信仰も浸透しつつあったことがわかり、どれも地域の歴史を解明していく上で欠くことのできない資料となった。

当財団ではこれらの調査成果を、昨年度「印旛沼に栄えた文化　公津原再発見―成田ニュータウンの遺跡展―」と題して、千葉県立房総のむらで２会期にわたって出土遺物公開展を開催した(注１)。幸いにも筆者はその作業の一部に携わる機会に恵まれ、出土資料と直に接することができた。

展示資料のリストアップを進める中で、改めて発掘調査報告書(注２)に目を通していたところ、ここで取り上げる天王・船塚11号経塚(注３)出土の経筒が、中世の数少ない資料の一つとして目にとまった。関連資料を片手間に漁ってみると、経筒の多くが不時に発見されることが多いなか、11号経塚出土資料は歴とした発掘調査で出土したもので、しかも経筒の形態から帰属時期をある程度限定できることがわかった。しかしそれだけ貴重な資料にしては、報告書における記載があまりにもあっさりしているのが気になっていた。そしてあるとき、展示の参考資料にと考えていた『週報』のページを繰っていたところ、そこに11号経塚に関する『報告書』より詳しい記述があり、『報告書』には掲載されなかった測量図や経筒の実測図まで掲載されていることがわかった(注４)。

後で少し触れるが、『週報』は内部資料としての性格が強く、入手困難ないわゆる灰色文献に属す。当財団図書室で所蔵している『週報』も、平成６（1994）年にコピーを製本したものである。そうした希少性を考えれば、11号経塚に関する『週報』の内容を公にすることは、今後の調査・研究に少なからず資するところがあると思っていた。しかしなかなか実行に移せず時間だけが過ぎ、やっとその機会を得たので稿をおこすこととした。そこでまず『週報』掲載の図はすべて再掲し、内容についても要点をかいつまんで再録することにした。また折角の機会なので経筒と塚という視点から、気づいたことも交えながら、可能な範囲で資料の意義づけも行ってみることにした。

２．『週報』について

『週報』の刊行主体は財団法人千葉県北総公社業務部業務課文化財調査第１班（昭和44年９月16日設置）で、当財団の文化財センターが財団法人として産声を上げる前の母体となった機関の一つになる。『週報』は成田ニュータウンの調査開始にあたって刊行が始まり、１号の発刊日は昭和44（1969）年10月20日で、終刊の90号の発刊日は昭和46（1971）年７月19日になっている。その差分日数を７で割ると91になり、終刊にあたる号数とほぼ等しい。発刊日が１月２日という号もあり、長期にわたって、『週報』の名に恥じない発刊計画を着実に守っていたことになる。内容もさることながら、その律義さに改めて敬服させられる。

『週報』はＢ５判で、当初はザラ紙に手書きの謄写版印刷だったのが、すぐにタイプ印刷に代わり、図の貼りこみも行うようになっていく。タイプの級数は16級（11ポイント）程度で、35文字×23行詰めを基本と

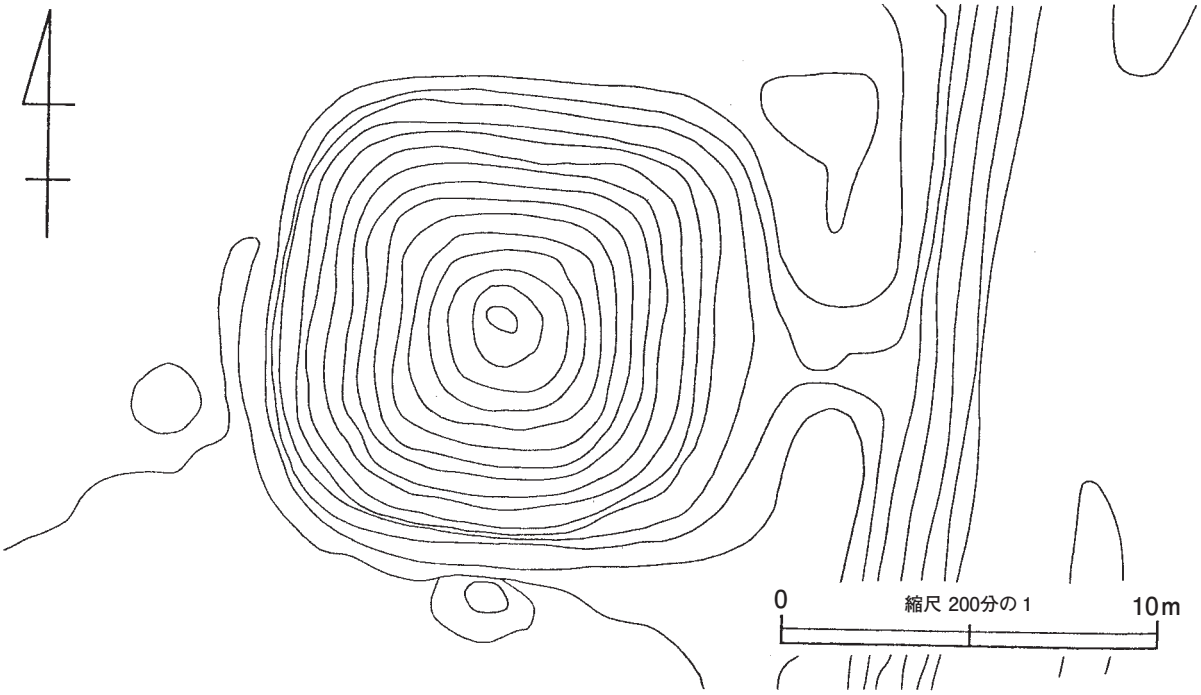
している。毎号10ページ程度で、内容の前半は、基本的には週刊の業務報告に類する日誌で、調査中の遺跡名、作業内容、調査担当者、作業員（班）と人数などを記載し、後半に主だった遺跡調査の概要などを中心に編集し、毎号、来訪者を克明に記録しているのが目をひく。また打合せや検討会の会議録、そして論考的な小文を単発的に掲載することもあり、『報告書』を補完する内容も多々見受けられる。ただ個人に帰する文章であっても、例外はあるものの、基本的には文責を明示しないという不文律があったようである。また各号には編集担当者による「後書き」があって、これにはだいたい記名があって、その時々の思いが語られることもあり、個性豊かな一面も覗かせている。そういう意味では当時の発掘現場の雰囲気を追体験できるばかりではなく、場合によっては裏方事情まで知ることができる格好の素材にもなっている(注5)。

３．遺構に関する『報告書』と『週報』の記述

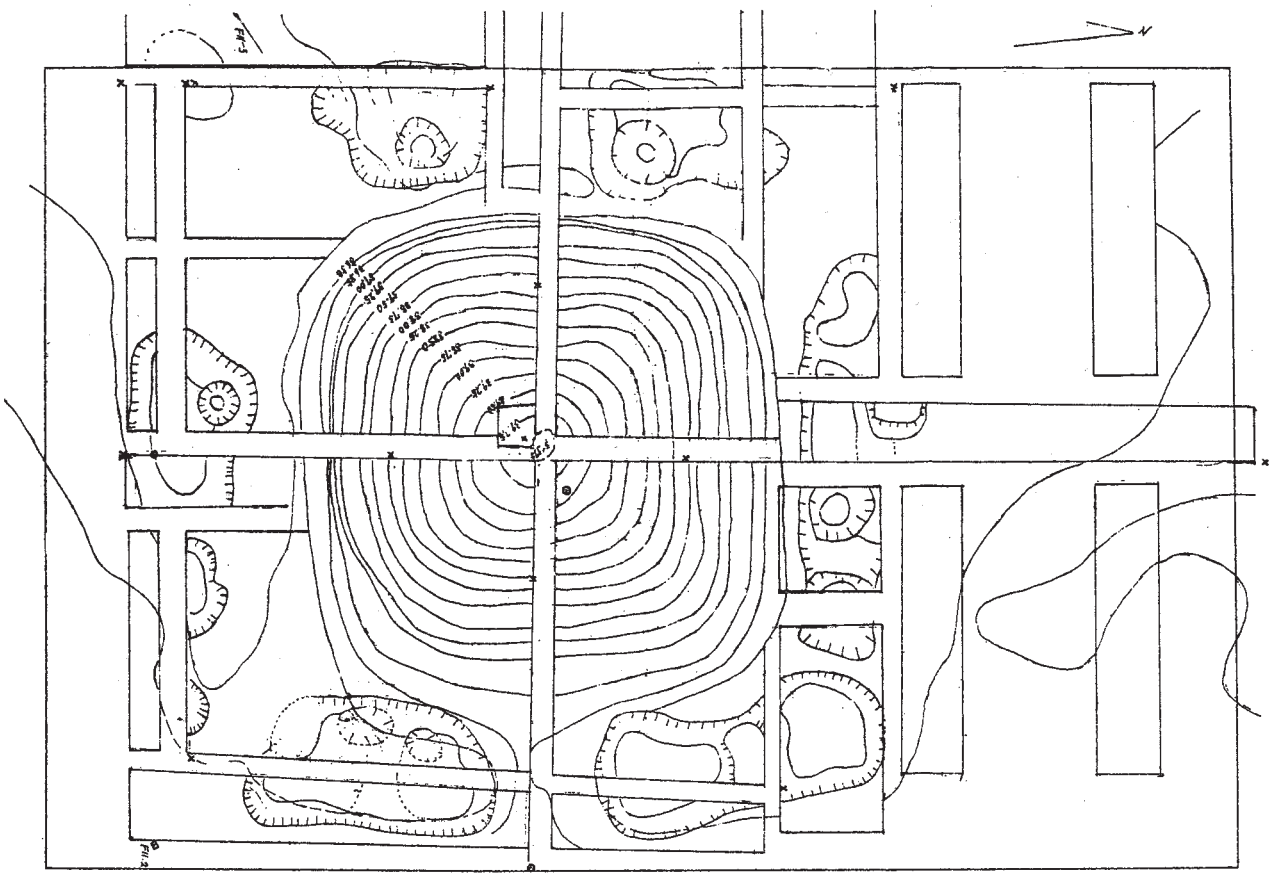
『報告書』における11号経塚の内容について紹介しておこう。見出しは天王･船塚の略称を用いて、「Ｔ・F11号墳」とする。本文の該当箇所は250・251ページで、11号経塚以外すべて古墳なので、古墳に従った７項目（調査年月日(注6)・位置・墳形・外部施設・内部施設・出土品・その他）について列記している。文字数は400字弱になる。要約すると、形状は截頭方錐形で、９段の段築で築成されており、裾部を巡る溝は掘削土を墳丘に供給した形跡とする（巻頭写真３）。また東側で多量の焼土が検出されたというが、図示がなく、詳細は不明である。出土品としては塚頂部直下からカワラケ小皿、永楽通宝２点(注7)、経筒１点、そのほかに寛永通宝が６点出土したとする。掲載図は調査前の墳丘測量図（第70図）と封土除去後の全体図（第71図）をそれぞれ１：200で掲載しているだけである。また写真図版はPL.156・157に、調査前の墳丘・段築・断面・経筒出土状況を半凸４葉で掲載している。簡素な内容で、あるいはすでに『週報』で報告済みということで、報告書作成時の様々な制約もあって、省略した部分が多いのかもしれない。なお調査担当者は前後の『週報』の日誌欄から、川戸・平井の両名が担当していたことがわかる(注8)。

次に『週報』における記載に移ろう。掲載号は70号で、発刊日は昭和45（1970）年３月１日になり、当日は日曜日にあたる。タイトルは「ＴＦ11号経塚調査経過報告」とする。本文の文字数は3,500字ほどあり、文字量だけでも『報告書』の９倍近くになる。構成は大きく遺構と遺物に分かれ、遺構の項目はマウンド、溝、土坑、ピット群となり、遺物の項目は経筒、銭貨、カワラケとなっている。『報告書』の内容と重複するものを含めて、以下に要約しておく。

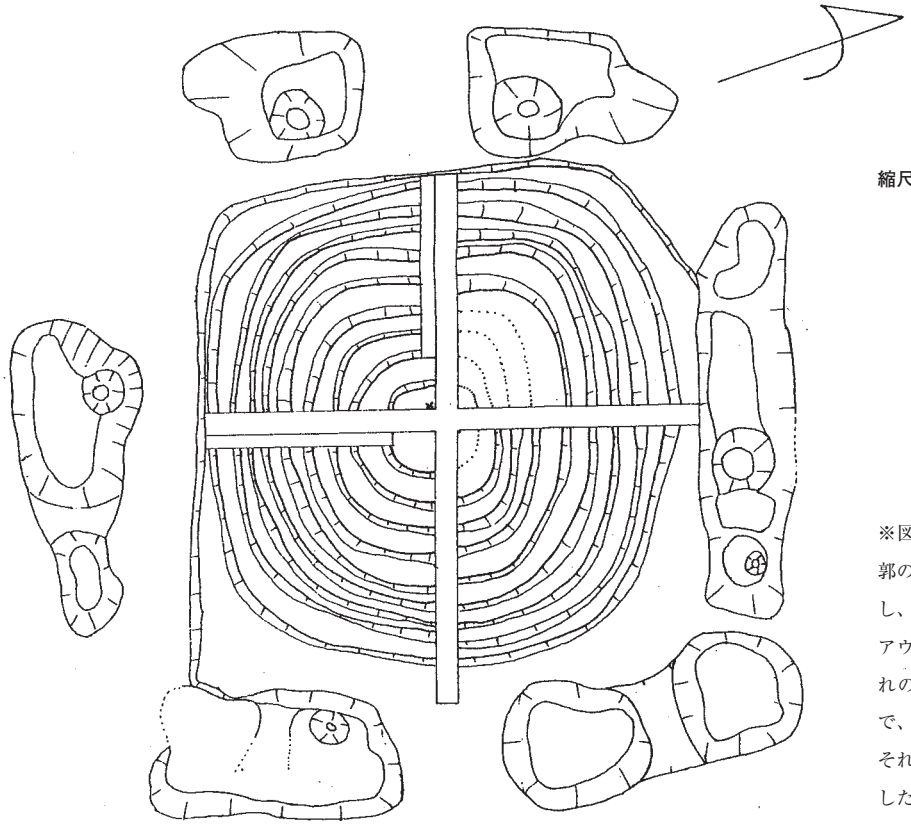
遺構の説明は立地から始まっている。マウンドの形状等については、１辺約13m、高さ2.67mの截頭円錐形で、９段築成という記述は『報告書』にも引用され



第１図　『報告書』の地形測量図



調査前の墳丘とトレンチ配置図



縮尺 約200分の１

段築の測量図

※図の掲載にあたって、『週報』では画郭の関係で調査前の墳丘図は北を右横にし、段築の墳丘図では北を上にしてレイアウトしていた。再掲にあたってそれぞれの図の方位が異なるのは煩わしいので、北を右手に向けた状態にそろえた。それに伴って標題・方位等の位置を移動した。線のかすれ等については適宜、原図を損なわない程度に補筆した。

第２図　『週報』の墳丘測量図２題

た内容になる。しかし各辺の設定が正方位に近いとか、おそらく旧表土面のことを指していると思われるが、基底面に焼土が混じり、部分的に堅く搗き固めた形跡があり、四隅はいずれも堅く搗き固められていたという記述などは『報告書』から漏れた内容になる。これらの記述から、塚の構築にあたって地鎮のような意味合いもあったのかもしれないが、山焼きを行い、塚の各辺を正方位で計画し、盛土面を堅くしてから盛土作業に移ったことを想像させる。

そして塚各辺の裾部には、『週報』では溝とする不整形な落込みがある。図等も参考にすると、全周するわけではなく、長さは最も長いもので11m、幅は2.0m～3.5mで溝内の掘込みの形状によって広狭がある。溝内の掘込みは西側と南側に顕著で、大きさは径1.2m~1.5m、深さは約50cmある。溝同士をつなぐ部分をブリッジと表現している。東側の溝では底面に接して炭化物混じりの焼土を確認しており、東南部の溝では特に顕著であったという。西辺と東辺という対向する位置関係にある溝の中央部を陸橋状に掘り残している。塚への参道のような機能を果たしたのであろうか。次に土坑２基について触れているが、図示がなく、塚造営以前の遺構という所見なので、ここでは省略する。

塚基底部のソフトローム面上で、遺構と認定できたピット群は12基からなり(注9)、マウンド構築に際して敷設された施設の柱穴という理解のようである。ただ残念なことに図示されてないので、これ以上検証のしようがない。ただ仮に側柱建物とした場合、梁行１間のような極端に細長い建物は考えづらいので、柱穴の数から４間×２間か３間×３間を想定できる。桁行の長い４間を柱間寸法1.8mで想定しても、塚基底面の広さには収まる大きさになる。仮設的建物ということであれば、幄舎が適当であろう（山中 2003)。

なお遺構図は２点あり、調査前の墳丘測量図にトレンチ配置を重ねた図（第２図の上）と段築の図（同下）で、それぞれＢ４判の折り込みで綴じられている。添えられたスケールから図の縮尺を割り出すと、前者が114分の１で後者が118分の１と、分母が端数になる。製版の過程で縮尺に端数が生じたのであろう。経筒の出土位置は段築の図に「×」印で記入している。

経筒については、『報告書』では出土の事実を記載しているだけなので、『週報』の要点を引用し（第３図)、合わせて所見も少し書き加えておく。

経筒は塚頂部の深さ10cmほどの表土中から、蓋の一部と筒身と台座部分が出土した。蓋の一部と言っているのは、蓋と連結していた帯状金具を指す。また本来筒内に収められていた経文は確認できなかったという。表土中から出土したので、表土除去の段階で出土したことになる。表土の厚さと経筒の総高を考えれば、横倒しで出土したというのが真相であろう(注10)。調査時の出土状況写真をみると、経筒の下面に土砂を抱いていないようにみえるので、一端取り上げて土を払い、元の位置に戻して撮影したようにみえる（写真１・２)。いささか作為的な印象をうける記録写真だが、これによって経筒が表土除去中に出土し、経筒を納めた掘り込みや外容器が存在しなかったことが証明されている。なお経筒だけを墳頂部に据え置いたとは考えにくいので、簡単な覆屋等の施設が存在したのではないだろうか。

経筒本体については、今回改めて採寸等は行っていないので、『週報』の数値をそのまま引用する(注10)。掲載図は正面・縦断面等からなり、標題に実寸と謳っているが、遺構図と同様、製版時に１割程度縮小している。なおこの図をもとに書き起こしたと考えられる図が足立順司によって公にされている（足立 2011)。出典として『報告書』・『週報』をあげているが、既述のとおり『報告書』では図を掲載していないので、『週報』の図を元に書き改めた実測図なのであろう（第３図)。

写真１　経筒・銭貨出土状況近接写真

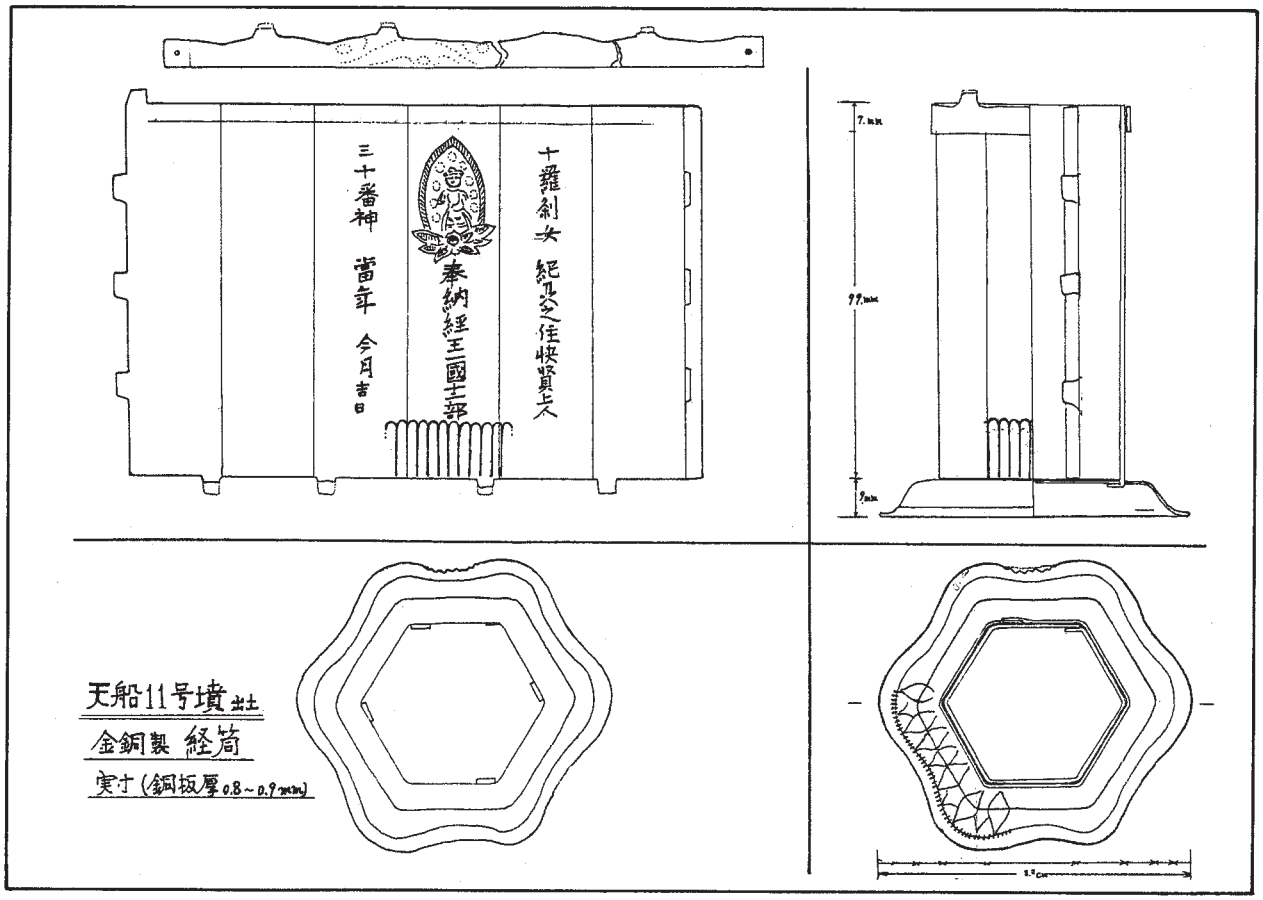
写真２　経筒・銭貨出土状況俯瞰写真

経筒の筒身一面は2.4cm×9.9cmの短冊形で、これを１枚の銅板から６面分を成型し、折り曲げて６面体にしている。うち正面と左右各1面の計３面に、それぞれ１行ずつ銘文を刻む（第３図）。主銘文の上に釈迦座像を置き、筒身基部には縦蓮子を1面に９本程度を割り付けて打ち出している。主銘文の内容については後述する。また筒身の中程に横方向の罫引きの細いアタリが残る。身幅は4.9cmで、合わせ目にツメを受ける切り込みを３箇所あけ、銅板の反対側のツメをそこに差し込み、折り曲げて結合している。

台座は高さ9.0mm、最大幅8.2cmで、６弁の荷葉座に形づくる。35葉の蓮弁文様を型打ちし、蓮弁の先端部に接して鑿の刃先を跳ね上げた線刻が一巡する。蓋の帯状金具は幅６mm～７mmで、上部には蓋と固定するためのツメが、伸びた状態で残っていた。帯の合わせ目は縦矧ぎで鋲止めとする。点列の打ち出し文様があるが、具体的な意匠は不明である。

以上が経筒に関する説明になるが、ほかにも興味深い記述があるので、原文のまま掲載しておく。

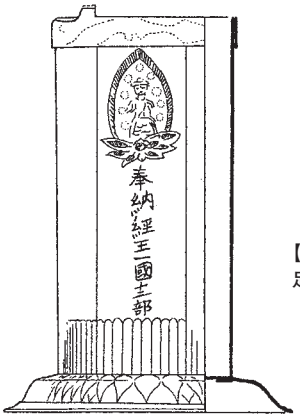
「本経筒で注目すべき点は、被セ（ママ）蓋と筒身との被せ



縮尺 約２分の１

釈文

十羅刹女　紀州（州）之住快賢上人
（釈迦座像）奉納経王一國十二部
三十番神　當年　今月吉日



【参考資料】
足立 2011掲載図より転載

0　3cm

第３図　経筒実測図

目には紙痕が筒身の表面に残存していることである。この紙は、被セ蓋を筒身に密着させるために用いられたものか、彫金の折、図柄の紙を貼付した時の残りであるか、不明であるが、筒身を巡っている。」というものである。現状では、すでに保存処理も終了しており、そうした痕跡を確認することはできないのは残念である(注12)。

そして仏画と銘文の記載方法から、年代を室町時代とした。また銘文にある「快賢上人」についてもその足跡を求め、余念がない。結局、成田近隣の寺院ではその名を見いだせず、八代の宝徳寺の六角堂に関連するかとする。なお執筆者は当然のことながら明記されていないが、その後の業績等から類推すると、川戸彰の可能性が高い。

4．11号経塚の塚の形態と出土経筒の銘文

11号経塚から出土した経筒は、その形態と銘文の記載内容から、六十六部聖が大乗妙典（法華経）を書写し、納経したことは明らかである。六十六部聖とは鎌倉時代に発生した「日本回国大乗妙典六十六部経聖」の略で、原義的には六十六部の経を書写し、全国六十六箇所の霊場を巡拝して、一部ずつ経を納めた廻国聖のことをいう。六十六という数字は教義上の聖数にも通じ、国土を神聖視し、それを一種の曼荼羅世界とみなす思想がある（小嶋 2016）。

法華経は経王の一つに数えられ、大乗仏教の重要経典である。六十六部聖は13世紀末頃から納経に際して経筒を用いるようになる。その経を収めた経筒を六十六部聖が塚や土中に埋納し、寺社にも奉納した。16世紀代になると納経に小型経筒を採用するようになり、巡礼は全国に広がってピークを迎える（関 1987）。一方で聖の世俗化も進行し、16世紀末には諸宗寺院の開創が相次ぎ、聖も定住するようになる。さらに幕藩体制下に寺社の統制が進むなかで、遊行的な聖の社会的な意義は益々失われていく（田代 2003）。

11号経塚を経筒が出土した古墳の１例として取り上げられることがある（関 1985・関 1987）。確かに古墳の墳丘に経塚を築いた例は全国に50例ほどあり（安藤 2011）、福井県今立郡朽飯八幡神社境内の古墳のように石室内から出土した例もある（関 1985）。

県内では旧香取郡干潟町の御塚経塚などがその例になる（川戸 1990）。御塚経塚は直径22mほどの円墳で、墳頂部から永禄３（1560）年の紀年銘のある、円筒形の経筒が出土した。ほかに天文10（1541）年８月の紀年銘がある経筒が出土した香取郡神崎町の武田経塚も古墳群中にあることから、その可能性が指摘されている（川戸 1990）。ただし周辺の古墳には埴輪を伴うにも関わらず塚から埴輪は出土せず、埋葬施設も確認できなかった。また墳丘の稜線が明瞭なことを根拠としているのであろうが、方形の墳丘形態からもともと塚として築かれたとみる意見もある（足立 2011）。

したがって11号経塚も古墳群の中にあることから、古墳を再利用した塚という理解に帰着するのも無理もない。しかし『週報』の冒頭で述べているように、調査前の確認状況から通常の古墳とは異なるとの予測が立てられるほど、異質な作りであった。そこで段築という構造と方墳との相違点という２点から、改めて調査時の所見をもとに検証しておきたい。なお『報告書』の写真図版に掲載された塚の断面写真（PL.157）でも、古墳から塚へ改変したような形跡は確認できない。

A　段築の塚

県内にはおよそ2,000基を超える塚が存在すると言われており（千葉県教委 1978）、形態は方形と円形があり、１辺長が10mを超えるもののほとんどは方形になるという傾向がある。古墳ではしばしばテラス状の段築を行った墳丘が存在するが、塚で調査によって段築を確認できた例は非常に限られている。

県内の三山塚以外で段築した塚の調査例は、管見にふれたなかでは成田市川栗台古墳群の塚（２号墳）が唯一の例になる。塚の一辺長は8.6m～9.8m、高さ４mで、比較的整った形態を残していた（工藤 1978）。段築の状況は土層断面と表土を除去した状態から５段の段築であることを確認している。出土遺物として旧表土上から渡来銭が12枚出土し、そのなかに「永楽通宝」を含んでいても、「寛永通宝」を含んでいないわけだから、これを手掛かりにすれば、中世末もしくは近世初頭の銭種構成と類推できる。それは渡来銭から寛永通宝への交替が、古寛永通宝の大量鋳造によって迅速に、しかも断絶的に進行したと考えられているからである（鈴木 1993）。時期的には11号経塚からやや遅れる程度と考えられる。段築の段数はともかく、中世末から近世初頭に塚の築造に際して、段築を採用する風習があったことがわかる。なお11号経塚の段築の９という数字は、『観無量寿経』に説かれている九品往生に通じるのかもしれない。

B．周溝をもつ塚

次に11号経塚の古墳（方墳）との相違点を確認しておこう。最も気になる点が、古墳の周溝とは似ても似つかない裾部の掘込みである。県内でも塚（方形）の周溝の一部を陸橋状に掘り残す調査例が多く知られており、その分布は北総北半の、印旛沼を囲む東西に長い範囲になる（鳴田 1994）。11号経塚はその分布範囲にちょうどおさまっている。塚を祭壇に見立てて、陸橋を出入り口に想定する場合もある。また11号経塚が四辺にそれぞれ単独の長方形の掘込みを伴うという点では、印西市（旧印旛村）の吉高家老地遺跡の塚などにその類例がある（三浦ほか 1976）。これらほとんどの塚は出土遺物もなく成立時期に関する根拠は希薄だが、多くは11号経塚より後出で近世の所産であろう。その展開が、11号経塚が帰属する地域にある程度限定されるのであれば、11号経塚だけに限定するつもりはないが、こうした先駆的な様式を採用した塚の一群があって、それが地域に根差していったと考えられる。また古墳としての主体部等の埋葬施設が見つかっていないことも傍証に加えれば、墳丘断面からもわかるように11号経塚は、当初から塚として築かれたのである。とくに段築の築成は結構限定的な所産だから、経筒の埋納という希少な事例と一体であった蓋然性が高いといえよう。

C．経筒の形態と銘文

経筒はその横断面形から円筒形・六角形・八角形の３形態がある。1988年の段階で全国に300個体以上の出土例があり、大半を円筒形の経筒が占め、六角形の経筒は43個体の出土例があるとされている（関 1987）。県内の出土例は、原品の所在が不明になっているものや不確かな例も含めて16例ある（表１）。六角形のものを特に六角宝幢形経筒と呼んでいるが（三宅 1968）、県内では11号経塚出土経筒が唯一の出土例になる。なお参考としてあげた出土地不明の１点は、永禄２（1559）年の紀年銘があり、「下総國」という、まさに千葉県の旧国名を刻む。六角宝幢形の経筒ということもあって、参考までに挙げておいた。

11号経塚出土資料に奉納の年月日の記載はなかったが、紀年をもつ六角宝幢形経筒のこれまでの出土例では、天文20（1551）年から天正13（1585）年までの16世紀後半の年号に限られ（関 1987）、実に短期間の所産であることがわかる(注12)。なお「當年　今月吉日」という記載方法も16世紀後半以降増加する傾向があり、埋経の日程を事前に決めずに経筒の製作を注文する事例が増えていった結果といわれている。したがって11号経塚出土の経筒も16世紀後半の第３四半期を中心とした年代を考えるのが妥当であろう。また筒身の10cm程度という長さも、16世紀になると小型化して10cm程度になるという傾向とも軌を一にしている。なおこの小型化の背景については、聖が笈に収めて遊行するのに都合のよい大きさといわれている。

次に銘文の記載について触れておきたい。主銘文の「奉納経王一國十二部」という記載は、一般に一国に納経を行った箇所の員数を表すと理解されている

表１　千葉県内経筒出土資料一覧

番号	名　称	出　土　地	紀　年	形態(個数)	主　銘　文	備　考
1	谷津経塚	成田市(旧香取郡下総町)西大須賀	大治4(1129)年3月16日	円筒形×1		紙本経残塊、瑞花双凰鏡、金銅鈴、垂飾金具
2	千葉寺経塚	千葉市（中央区）千葉寺町	—	円筒形×2		秋草双雀文和鏡、青白磁合子、檜扇・蝙蝠扇断片、ガラス小玉、鉄釘ほか、県指定
③	葛飾八幡宮経塚	市川市八幡	—	円筒形×2		松喰鶴鏡、刀
4	引田村経塚	市原市引田	建保3(1215)年	円筒形×1		原品不明
5	引接寺址(等覚寺)経塚	銚子市岡野台町	建長4(1252)年2月5日	円筒形×1	奉為悲母禅尼也 施主　平胤方	県指定、紙本経残塊？、常滑小形広口壺、高森1993
6	龍角寺経塚	印旛郡栄町	—	円筒形×1		紙本経巻の断片、県指定
⑦	旭森経塚	鴨川市(旧安房郡天津小湊町)清澄寺	応永3(1396)年	円筒形×5？		常滑壺内に収める、県指定
8	天王岡経塚	市原市青柳	大永8(1528)年	円筒形×1	武州六郷之住呂、六十六部 聖圓勝	六十六部聖の房総最古の資料
9	芝山経塚	山武郡芝山町	天文9(1540)年3月	円筒形×1		関 1985、原品不明、「願主□妙鑒為也」
10	武田経塚	香取郡神崎町武田	天文10(1541)年8月	円筒形×1	六拾六部敬白、下総之住本 願大乗坊	経文3巻分残片、栗本 1972
11	坊前経塚	成田市土室	天文17(1548)年	円筒形×1	六十六部聖、野州住慶尊(専)	付近に宝暦2（1752）年銘の廻国供養塔がある
12	御塚経塚	旭市(旧香取郡干潟町)蕪木	永禄3(1560)年	円筒形×1	道賀禅定門逆修 鏑木信濃守胤定	古墳を利用した経塚の1例、大型経筒
⑬	玉前(一宮)神社経塚	長生郡一宮町一宮	元亀2(1571)年5月5日	円筒形×1(注1)	一宮奉納、松田氏	柴田常恵による拓本のみ、原品不明
14	出野尾経塚	館山市出野尾	不明	円筒形×1(注2)		入れ子になった甕の中から出土、原品不明
15	天王・船塚11号経塚	成田市八代	當年　今月吉日	六角宝幢形×1	紀州住快賢上人	本稿
16	文脇遺跡	袖ケ浦市上泉	—	円筒形？×1		経筒蓋かとする。推定径7.0cm。山本 1992
17	(参考資料)	出土地不明	永禄2(1559)年	六角宝幢形×1	下總國之慶圓敬白	関 1985

※　表の作成にあたっては、川戸 1990、木村 1995を参照した。
※※　番号欄のうち○数字にしたものは、巡拝地にリストアップされている地点に経筒が埋納された事例を示す。
注１　川戸 1990の「経筒の大きさは、高さ15センチ、径３センチ」との記述から円筒形とした。
注２　川戸 1990の「経筒の蓋は（中略）径６センチぐらいの丸い銅製」との記述から円筒形とした。

（関 1988）。なお『週報』も含めて、これまで実見の結果として「十二部」と釈読されてきたが、「二」の部分に筆画の点らしき痕跡もあり、そうであれば「六」の可能性もある。これに関しては今後の精査に期待したい。そして主銘文の左右には法華経を守護する「十羅刹女」と「三十番神」を記載し、さらに「十羅刹女」の下には奉納者、「三十番神」の下には年月日を記載し、多くの出土例がこの記載方法を採用しており、11号経塚例もその原則に従っている。

奉納した六十六部聖名の「快賢上人」から、「快賢」の僧名を記事の帰属時期の不明なものも含めて、時期を問わず管見に触れたものを集めたのが表２である[注14]。これらをみていくと、一つの僧名の出現頻度の多寡が問題となるが、「快賢」という僧名は長期にわたって、しかも度々登場する僧名であることがわかる。各宗派、さらにその流派で僧籍をどのように管理したのかわからないが、「快賢」という僧名は真言宗に多くみられる傾向がある。なお表番号６番と７番の阿闍梨快賢は、同年の記銘で中国地方の足跡ということを考えると、同一人物とみて間違いないであろう。

そこで11号経塚出土の経筒を16世紀後半とすれば、表２の一覧から該当するのは次の３例になる。年代の古いものから、表番号18番の天台宗能満寺（神奈川県川崎市高津区）に関するもので、天文年間（1532～65）に現在地に移転し、開闢したと伝える「快賢法印」である。19番は中山観音堂（熊本県球磨郡多良木町）の鰐口に関するもので、弘治４（1558）年に真言宗の僧侶快賢により追刻のうえ奉納されたというものである。そしてもう一つが20番の、弥勒寺（奈良県御所市）の堂宇再建に伴う天正７（1579）年の紀年がある棟札の裏面に墨書された「快賢」である。弥勒寺は高野山真言宗の寺院で、貞治４（1356）年に楠正行の軍を破った北朝の高師直軍によって焼かれ、その堂宇を復興した際に納められた棟札と考えられている[注15]。

いずれも経筒の銘文にある「紀州之住」とは異なる。しかし先回りして結論めいたことを言ってしまうと、18番は法号が上人号ではなく、それ以上のつながりを見いだす術もみつからなかった。19番も九州との関係となると、遠隔地ということもあって直接の結びつきを求めるのは難しかった。いっぽう20番の「快賢」は上人号こそないが、公津原という土地とそこを取り巻く当時の宗教環境から説き起こしていくと、この「快賢」が快賢上人であってもおかしくないという見通しをもつことができた。そこで改めて銘文の「紀州之住」を手掛かりに、まず納経の巡拝地という視点から、地域の宗教環境を下地に試案を提示していこう。

５．当時の宗教社会から見た出土経筒の銘文

A．巡拝地としての公津

諸国を巡拝した六十六部聖は全国六十六ヵ国を廻ることが重視され、諸国の一宮や国分寺を中心に著名な霊場を巡るのを原則としていた。しかし実際の廻国の巡拝の方法や経路に定めはなく様々で、納経所やルートは巡礼者の選択に任されていた。戦国期のものと考えられている「六十六部奉納札所覚書」には、県内の納経の霊場を安房国が清澄寺、上総国が上総一宮（玉前神社）と飯香岡八幡宮、下総国が香取神宮と葛飾八幡宮がみえ（寺尾 2007）、清澄寺、上総一宮、葛飾八幡宮の３箇所で経筒の出土が知られている。しかし経筒の出土地は、全国の出土例に照らしても、むしろこうした霊場以外からの出土のほうが圧倒的に多い。

経筒を埋納する場所として、『如法経現修作法』[注16]では「奉納所横川如法堂。其外之靈地聖跡等。或所住之寺。或亡者墳墓之近邊。隨意不定也。」とし、霊地・聖地もその他として埋経の対象地としている。公津原には11号経塚以外にも、供養塚と考えられる塚が数基保存され（今泉 1997）、公津原一帯が古墳も含めて霊地・聖地とみなす条件がそろっているからこそ、埋経行為の対象地となり得たのであろう。また真言宗智山派の成田山新勝寺の縁起にも公津がみえる。縁起によれば天慶３（940）年に公津ヶ原に創建され、永禄９（1566）年に現在地に移したという（大野 1986）。

公津原のこうした景観を、江戸時代末の地誌である『利根川図志』（赤松 1978）に赤松宗旦が取り上げて、「神（公）津八十墓　在神津村東北二三里原上多数故名之傳千葉氏也世之塋然不詳名誌焉」とする。公津村の東北数キロに多くの塚があるのでこの名があり、名誌を詳らかにしないが、千葉氏の墓であるという言い伝えがある、という。塚を千葉氏に関連付けている点が興味深い。

B．公津原と高野山との師檀関係の成立

11号経塚で経筒が埋納された頃よりも前の、戦国時代になった頃から、武家社会を中心に信仰の対象が熊野三山から天下の霊場としての地位を築いてきた高野山や伊勢神宮への参詣へと変化していく（寺尾 2007）。とくに高野山信仰が全国的に普及するにつれ、供養だけではなく、高野山の子院が各地の有力者である大名家一族を中心に、領国単位で高野山の特定の諸院を宿

表２　快賢に関する関連史料

番号	名　　称	記　　事・内　　容	年　　代	出　　典	備　　考
1	快賢上人	安穏寺（茨城県稲敷市）を創建	延暦24（805）年	http://blog.goo.ne.jp/05100625777/e/209a4f3ddb52b5583bff92c41079437a	天台宗龍華山慈尊院安穏寺
2	快賢僧都	壬生寺（京都市中京区）を定朝作の地蔵尊像を奉じて建立	正暦2（991）年	中井 1992	園城寺（三井寺）僧（天台宗）
3	沙門快賢	鞍馬寺（京都市左京区、注1）吉祥天女像胎内経奥書 82歳で逝去	大治2（1127）年 天承元（1131）年	藤原宗友『日本往生全伝 8 本朝新修往生伝』 http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/822298?tocOpened=1	経巻奥書（猪川 1960・浜田 1971） 下野国の人
4	快賢上人	『三教指帰』（建長本）を出版	建長5（1253）年10月	正木 1994	高野山金剛峯寺の僧
5	快賢	塩船観音寺（東京都青梅市）木造千手観世音菩薩立像造像銘	文永元（1264）年	http://park2.wakwak.com/~ome.net/24bunkazai0128.html	真言宗醍醐派塩船観音寺 仏師快勢・快賢によって造像
6	僧（阿闍梨）快賢	発願により、安国寺不動院（広島市東区）の木造仁王立像の造立を始める	永仁2（1294）年	広島県史年表（中世1） https://www.pref.hiroshima.lg.jp/soshiki_file/monjokan/nenpyou/nenpyou-cyusei1.pdf	真言宗新日山（近世に禅宗から宗旨替え）安国寺不動院胎内墨書銘 安国寺恵瓊ゆかりの寺院
7	阿闍梨快賢	福楽寺（山口県柳井市） 木造二天王立像銘文	永仁2（1294）年	山口県の文化財－文化財要録 http://bunkazai.pref.yamaguchi.lg.jp/bunkazai/summary.asp?mid=90014&pid=bl&svalue=&bloop=&mloop=&floop=&shicyouson=&meisyou=&shitei=&kubun=&syurui=&jidai=&loopcnt=&m_mode=&m_value=&m_loopcnt=	真言宗御室派医王山福楽寺 山口県指定文化財（彫刻） 大願主阿闍梨快賢
8	快賢上人	多聞寺（香川県綾歌郡宇多津町）を再興	延元4（1339）年	http://town.utazu.kagawa.jp/town/kankou/kankou-3/	真言宗御室派寶塔山多聞寺
9	円識坊快賢	南北朝の戦に僧兵快賢が手柄をたて、恩賞を受けたときの記録 「円識坊快賢去年合戦ニ副ウ　恩賞中臈ノ悦酒　三経院ニオイテコレアリ　三肴毛立タカンナ　ウトム　フ　サウナメ　ヒワーフサ　白瓜切リ少々」	貞和3（1347）年7月7日	小林 2010	『嘉元記』貞和3年7月7日条 うどん、麩の初出記事
10	快賢（助阿闍梨）	文書請取状案	貞和4（1348）年5月4日	「阿闍梨快賢質物文書請取状案」 http://hyakugo.kyoto.jp/contents/detail.php?id=4824	『東寺百合文書』（注2）
11	越中都維那快賢	近江国仰木庄をめぐる青蓮院　門徒と妙法院門徒が合戦への参加	応安4（1371）年7月1日	野地 1998	『社家記録』応安4年7月1日条
12	権上座法橋上人位 快賢	注進 僧名事	永和3（1377）年5月	野地 1998	『八坂神社文書』上812号
13	快賢	大勧進	応永20（1413）年5月	「御影堂上葺用途奉加帳」 http://hyakugo.kyoto.jp/contents/detail.php?id=3277	『東寺百合文書』
14	座心坊快賢	供僧職に補任され、同日番帳に載る	応永21（1414）年6月27日	鶴岡八幡宮社務所 1996『鶴岡八幡宮年表』	
15	快賢法師	泉州大鳥郡高蔵寺（大阪府堺市）東寺修造奉加	文安元（1444）年9月20日	「和泉国高蔵寺東寺修造料足奉加人数注進状」 http://hyakugo.kyoto.jp/contents/detail.php?id=3547	『東寺百合文書』
16	經覺水門助公快賢	快賢及び宰相公祐濟を召し東南院候人等訴訟の下用につき尋問す	長禄4（1460）年2月	高橋ほか校訂 1977	興福寺別当大乗院第十八世門跡経覚の日記
17	快賢	高代寺（大阪府豊能郡豊能町） 第15代住持 坂上氏系図	永正年間（1504～1521）	『髙代寺記』（東京大学史料編纂所蔵書本） http://hokusetsu-hist.sakura.ne.jp/newpage1kodaiji2.html	真言宗仁和寺派七寶山高代寺塙 1997
18	快賢法印	能満寺（神奈川県川崎市高津区）を現在地に移転し、開闢と伝える	天文年間（1532～55）	https://junsaigokuinage33kannon.jimdo.com/%E9%9C%8A%E5%A0%B4%E7%B8%81%E8%B5%B7-%E5%90%84%E6%9C%AD%E6%89%80%E7%B4%B9%E4%BB%8B/%EF%BC%91%EF%BC%96-%E6%98%9F%E7%8E%8B%E5%B1%B1-%E8%83%BD%E6%BA%80%E5%AF%BA/	天台宗星王山寶蔵院能満寺
19	快賢	中山観音堂（熊本県球磨郡多良木町奥野）所蔵の応永四（ 1397）年銘のある鋳銅製鰐口の追銘 〔追銘〕正八幡宮御宝前　願主快賢 弘治四年戊午　三月日　施主各	弘治4（1558）年	大田幸博ほか 1987	真言宗僧侶という
20	快賢	弥勒寺（奈良県御所市）の堂宇再建に伴う棟札裏面の記銘墨書	天正7（1579）年	松本 1981、本文注 14	高野山真言宗龍華山弥勒寺
21	快賢上人	経筒銘文「紀州之住快賢上人」	16世紀後半	本稿	六角宝幢式経筒銘文
22	法橋快賢	眞言院における七日御修法に参加した僧の名前および役割を示したもの	寛永9（1632）年	「真言院後七日御修法請僧交名」 http://hyakugo.kyoto.jp/contents/detail.php?id=18056	『東寺百合文書』 『大日本古文書』第1巻　高野山文書ろ9
23	東宝院快賢	契沖の高野山における師	17世紀中葉	鷲尾 1992・大久保 1999	
24	快賢上人	善住寺（岡山県真庭市）の本堂客殿庫裏を建立	宝永5（1708）年	http://www.asahi-net.or.jp/~wj8t-okmt/400-02-maniwa-kuse-zenzyuuzi.htm	二十四世 真言宗御室派守宗山善住寺
25	快賢	法流相続に関する書状 綿打村大慶寺（群馬県太田市）	享保2（1717）年11月23日	http://www.archives.pref.gunma.jp/mkrok/list_02.do;jsessionid=892C8717438C5FD87F6A8B455C929B74?smode=2&col_01=H86-1-2%E8%BF%91%E4%B8%96&col_01_Ta=3&sNo=1&d_cnt_l=50&cc=col004&cc=col006&sbc=0&sbc2=-2&rflg=1&area=04&acc=2&all=&order=ASC	真言宗豊山派 妙満山蓮華院大慶寺
26	快賢	西福寺（神奈川県川崎市高津区）七世住職	寛保2（1742）年9月1日寂	http://www.kajigaya-saifukuji.com/	天台宗光永山寿明院西福寺
27	法印快賢	真言宗宝來山護東寺（廃寺）（宮崎県宮崎市）七世住職	寛延元（1748）年、古城（宮崎市）の生まれ	http://www.miten.jp/miten/modules/popnupblog/index.php?postid=98	仏師串間円立院の別名 天保5（1834）年、85歳で死去
28	快賢	東寺御影堂 観智院 花厳院　勧進		「東寺御影堂勧進帳」 http://hyakugo.kyoto.jp/contents/detail.php?id=3840	『東寺百合文書』
29	権律師快賢	御勧進五百疋	閏6月14日	「常施寺快賢東寺修造料足奉加状」 http://hyakugo.kyoto.jp/contents/detail.php?id=3773	『東寺百合文書』 常施寺権律師快賢

注１．比叡山から来た重怡上人が入寺し、保延年間（1135～1141）に真言宗から天台宗に改宗している（http://www5b.biglobe.ne.jp/~yoropara/tishiki/ks00429.htm）。

注２．『東寺百合文書』出典史料に関しては、「京都府立京都学・歴彩館 東寺百合文書WEB（hyakugo.kyoto.jp）」を利用した。

坊とする師檀関係の成立に発展していく。これは高野山が地方領主との関係を築くために地方進出した結果である（村上 2009ａ）。それをおもに担っていたのが廻国聖で、諸国を巡る中で高野山への参詣を勧めながら、地方領主との関係を深めていったわけである。その勧めによって檀那は納骨や供養や祈祷を依頼するようになっていく（寺尾 2007）。それを裏付けることのできる資料の一つが経塚などから出土する経筒などになる。

県内で高野山との師檀関係が最も早く成立した例は、天長元（1428）年に千葉胤直が高野山に詣で、蓮華三昧院を宿所とする契約を結んだ例になる。その関係は戦国末期まで継承されていく（寺尾 2007）。なお蓮華三昧院は蓮華谷の支谷である花折谷に位置した寺院になる。鎌倉時代初めに明遍が建立し、明遍を開祖とする蓮華谷聖が別所を構えたところである。寺そのものは明治21（1888）年３月24日の大火で類焼し、ことごとく焼失してしまい、今は往古の面影はない。なお聖は平安時代中期に流行した浄土信仰にあやかって誕生したもので、その後、高野山では在俗の念仏行者とする高野聖が出現し、諸国を遊行して、勧進と唱導を生業とした（松長 2014）。それによって高野山の経済的側面を支えていった。

高野山との師檀関係をめぐっては、様態が様々であったことが分かっている。例えば戦国期の武田氏家臣の場合では、在地領主のなかでもそれぞれ別の子院と師壇関係を結んでいるものが存在していた（丸島 2008）。また里見氏の場合でも、従前の宿所とは異なる檀那場を用いたことで争論が湧き起っている（寺尾 2007）。記録類の伝世の仕方という問題もあるだろうが、千葉氏の師檀関係については争論等に関する史料は伝わっていない。

ところで高野山と結んだ千葉氏の檀那所とはどのようなものだったのか、次の文書からその一端が明らかになる。それは蓮華三昧院に関する天正５（1577）年の原胤長判物で、印旛郡域を中心にした檀那所を書き留めたものである（木村 1983・千葉県 2003）。具体的には佐倉内外惣庄（佐倉市）、印西庄内十六郷（印西市）などを書き連ねたなかに、埴生庄諸郷（成田市）がある。埴生庄の庄域は成田市北西部から栄町東部にかけての範囲に比定され、諸郷には羽鳥郷・山口郷・成田郷などがある。北東部の庄界については、成田市東和田地域が時期によって帰属に異同があることから、香取郡との境界に接する地域と考えられている（木内 1998）。ちなみに地域内の東和田城跡から出土した鰐口の銘帯に「下総国埴生庄大和田八幡鰐口」と「長禄二（1458）年戊寅三月十五日道充敬白」の銘文があり、15世紀中葉には一帯が埴生庄に属していたことが分かる。

埴生庄に所属する郷のうち山口郷は、庄の成立に伴って成立した郷で、現在の町名に山口があり、公津原遺跡群のなかにも山口遺跡（Loc.20）があるように（天野 1998）、現代にも地名として引き継がれている。その南一帯が成田郷に比定できるので、地勢的な判断を加えれば、山口郷は成田ニュータウンの北端部と南東部の一部を除いた地域を中心とすると考えられる。当然、11号経塚も山口郷に含まれることになる。とすると経筒の銘文にある六十六部聖の出身地である国名の紀州を、在地領主が師檀関係を結んでいた高野山蓮華三昧院の一点に絞ってしまえば、遠く離れた領主層である檀那の本貫地とを結ぶ糸をここでやっとつなげられることになる。これを一つの足がかりとしておく。

なお具体的な領主については、近在には公津城（別称：鷺山城・根古屋城、下方字根古屋）、江弁須城（江弁須）などがあり、印旛沼東岸の一帯を掌握していた千葉氏の族臣である馬場氏関連の居城と言われている（伊藤 1986）。公津城は伝承によれば千葉胤宗の子、馬場五郎胤重の築城で、千葉氏宗家の隠居城ともいう。また千葉氏系図によれば、胤重から３代目の馬場八郎重胤の子に公津がおり、そこからさらに４代目の勝門には公津殿という通称を併記し（石橋 2015）、公津を直接あるいは二次的に冠した人名がみえる。したがって馬場氏がこの一帯の領主と考えて差し支えないであろう。『利根川図志』で、伝承が塚（古墳）群を千葉氏に結びつけていたのも、あながち見当違いなことでもなかったのである。

こうした武家と廻国聖のつながりについては、田代孝は六十六位聖による廻国納経が武家社会に支持された信仰形態であったとする（田代 1995・田代 2003）。いっぽう県内の例では足立順司が御塚経塚出土の経筒銘文と石碑の碑文、系図等を検討した結果、塚の築造と埋経行為は、長泉寺の檀越であった鏑木信濃守胤定が逆修供養を執行し、法名を授与されたことを明らかにした。経筒の年号は永禄３（1560）年で、出土した経筒は直径が15㎝ほどで、筒身高も21㎝から21.5㎝もあり、廻国聖の経筒とは明らかに異なる筒を用いている。廻国聖が隆盛を誇った時期にもかかわらず、廻国

聖が関与した形跡が見当たらない事例だが、埋経行為が武家社会と深く結びついた行為であったことを示している。

そしてそれを遡ること約300年、銚子市引接寺址（等覚寺）経塚出土の経筒が、平胤方が母親の追善供養のために法華経を書写し、建長４（1252）年２月５日に埋経したものと考えられている（高森 1993）。なお伴出した陶器製の壺は、写真から判断する限り、常滑産広口小型壺で第２段階６ａ型式期のものになる（中野 2013）。暦年代は13世紀中頃から後半に想定されており、経筒の紀年とほぼ一致し、経筒の埋納と関連する資料になるであろう。いずれにしても、ここでも武家が執行した埋経行為であり、相当早い時点から武家社会と埋経行為の結びつきがあったことが分かる。

Ｃ．廻国僧としての「快賢」

以上、多岐にわたる雑駁な説明となってしまったが、このように公津原という地域を治めていた上層社会と結びつきをもてた僧は、「快賢法印」の天台宗ではなく、高野山を中心とした宗教社会に属す僧侶と考える。ただし高野山では一遍が千手院谷で念仏化を進めると、真言密教の包摂の原理から、鷹揚に宗派を超えてそれを受容した結果、全山の聖集団が時衆（宗）化し、密教的な要素を忘れた六字名号の賦算と踊り念仏で諸国を遊行しながら勧進する聖へと変化していく（松長 2014）。それはやがて聖集団の世俗化に拍車をかけることになり、集団そのものの劣悪化をも招き、金剛峯寺側から聖集団に対する禁制が出されるようになる。宥快・長覚らによる「応永の大成」という真言の巻き返しを経て、15世紀末頃から高野聖の真言帰入が行われていくという（五来 1977）。

この時宗と千葉氏の関係をめぐって、木村修は千葉貞胤が時宗に改宗して以降、時宗に帰依し、蓮華三昧院との師檀関係も時宗が関わる可能性があるという。この問題について今、深入りはできないが、かれらの高野山における組織化された存在としては希薄であったといわれている（村上ａ 2009）。11号経塚の経筒の銘文にある「上人号」は、16世紀中葉という時代背景も考えれば、念仏をもっぱらとする下級の聖の称号とは考えにくい。やはり本来の聖の姿をした高野山の僧侶が、遠隔地の連絡を直接担ったと考えたい(注17)。なお「上人」号は、高野山では、本来、徳行に優れた高僧にたいする尊称だったのが、後に廻国して勧進したような、実務的な宗教行為に奉仕した僧にたいする尊称に変わっていくという（村上a 2009）。「快賢上人」の上人号は後者にあたると考えられるので、「快賢」が高野山から勧進のために下総国埴生庄を廻国していたとすれば、上人号に相応しい活動をしていたことの証しになる。したがって経筒の銘文が「紀州之住」であるならば、上人の尊称は何ら矛盾することはないといえる。

「快賢」という僧名は史上に度々登場するのはすでに表２でみたとおりで、個の特定にあたっては慎重でなければならない。例えば金剛峯寺歴代座主413世の座主名に使われている漢字の出現頻度をみると、「快」・「賢」は「覚」・「良」・「宥」・「実」・「栄」・「真」などとともに上位に位置し、「快」・「賢」のいずれも僧名として選択される確率の高い漢字となっている。しかしこれまでみてきたように経筒の銘文にある「快賢」は師檀関係にあった高野山に属したと考えている。そして「快賢」を史料上で確認できる、天正７（1579）年の年号を有する棟札のある弥勒寺も古義の高野山真言宗の寺院で、その総本山は高野山金剛峯寺になる。つまり両者は真言宗の同じ流派に属し、時期的にもほぼ重なる僧名になる。出現する確率の高い僧名であることは確かだが、ここではそれを承知の上で、あえて弥勒寺の棟札にみえる「快賢」と経筒銘文の「快賢上人」を同一の僧侶とみなしておきたい。つまり同じ流派で、ほぼ同じ時期に、しかも片や上人号の尊称をもつわけだから、同名の僧侶が近在に２名いたとは考え難いからである。取りあえずこれをここでの結論としておく。

そこからさらに想像を逞しくすれば、廻国の行を解いた「快賢」が高野山からの命を受けて弥勒寺へ派遣され、その復興に従事したということになる。ちなみに高野山金剛峯寺と弥勒寺とは、直線距離で約25㎞、徒歩のルートであれば30㎞を少し超える程度であろうか。高野山からのルートであれば、山を降りる行程になるので、１日あれば十分行き着ける距離になる。

なお表番号19番の「快賢」も真言宗の僧侶といわれており、そうすると20番と同じ宗派の僧侶ということになる。年代的に19番が先行することから、20番の前段に残した足跡の一端を物語っている可能性はあるかもしれない。今後の課題としたい。

６．終わりにあたって

ここで取り上げた公津原遺跡群の11号経塚から出土した経筒は、展覧会で展示する資料の一つということだけが接点で、当初はそれ以上に興味をそそられる資

料ではなかった。しかもこの分野は時代背景も含めてほとんど不案内なので、『週報』の関連箇所を広く世に出すことだけを考えていた。ただ少しでも肉付けしようと関連資料を渉猟するうち、いつの間にかついつい間口が広がってしまい、肝心な「高野聖」の動静については時間的な余裕がなくなり、浅薄な理解に終わってしまった。ただそうした至らない部分は多々あるものの、そこからおぼろげながらそこから見えてきたのは、当地を治めていた千葉氏一族が高野山と師檀関係を結び、遠隔地にある願主と高野山の子院との間を取り持ったのが、経筒銘文に見える「快賢上人」という、高野山に籍を置いたと考えた一人の僧侶の存在であった。状況証拠の積み重ねでしかないが、このような憶測が許されるならば、経筒の銘文にあった「紀州之住快賢上人」という、わずか８文字の世界をそれなりに説明できることがわかり、それを一つの解として提示してみた次第である。また塚の段築という形状についても、その特異性ということに注目すれば、この文脈からじゅうぶん説明は可能であると考えている。

最後に今後の課題を以下に列記し、これらの課題も含めて、小稿をたたき台に識者によるさらなるご検討をお願いする次第である。

1．六角宝幢形経筒については「出土品である場合でも保護容器を伴わぬなど、埋納方法に問題があり、この種の経筒は当初寺社に直接奉納するのを目的として製作されたものと推測され得るものである。」（関 1987）という見解がある。11号経塚出土資料に関しては、塚の構築と経筒の埋納は一連のものと考えたわけだが、塚頂部の表土中の出土ということもあり、簡単な覆屋的な施設を想定してみた。そうした事例がほかにあるのか、類例を具体的な出土状況から検証する必要がある。

2．経筒の奉納の背景には組織的な集団の存在があって、東日本では日光山や羽黒山がその拠点として推定されている（関 1987）。その背景に廻国僧の宗派がどのように絡んで、その勢力図がどう塗りわけられていたのか興味深いが、これも課題の一つとしたい。

それにしても経筒の実物資料と『報告書』だけでは、到底ここまでたどり着けなかった。そこには埋蔵文化財保護行政の黎明期に、千葉県ではじめての大規模調査に直面していた先人達が、調査の傍ら多大な労力を傾けて刊行した『週報』に対する熱意を折に触れて感じていたからにほかならない。副題に掲げた『週報』の再評価が、はたしてどこまでできたのかはなはだ心もとないが、ひとまずこれで擱筆することとする。

文中の敬称については煩雑を避けてすべて省略させていただいた。ご寛恕願いたい。なお巻頭及び本文中に掲載した写真は、千葉県立房総のむらの承諾を得たものである。その手続きや館蔵資料の収集にあたって白井久美子さんのお手を煩わせた。また弥勒寺現住職の金森光瑞師には弥勒寺の棟札に関するご教示と関連資料の提供をいただいた。深謝。

注

1．展示図録は、当財団のホームページからダウンロードできる。

2．成田ニュータウン関連の発掘調査報告書は２冊（千葉県企業庁 1975『公津原』・白石ほか 1981『公津原Ⅱ』）が刊行されているが、ここで引用するのは１冊目の『公津原』で、引用する場合には『報告書』と略す。

3．報告書では遺跡名を天王･船塚古墳群中の11号墳という意味で「天王･船塚11号墳」とするが、『週報』では調査成果を尊重して「TF11号経塚」としているので、それに従い「墳」を「経塚」に改め、以下、「11号経塚」と略すこととする。なお所在地の現住所は橋賀台２丁目になり、跡地は地蔵塚児童公園となっている。

4．『千葉県の歴史 資料編 中世１ 考古資料』でも取り上げられているが、文献は『報告書』をあげているのみである（木村 1995）。出土状況の写真は『報告書』の図版写真とは異なり、経筒を立てた状態で撮影したものを掲載している。

5．緊迫した現場運営の一端については、活字になった個人の日記抄でも垣間見ることができる（鈴木 2006）。

6．『報告書』では調査期間を昭和45（1970）年11月20日から12月25日とするが、『週報』の日誌によれば年が改まった２月22日まで何らかの現場作業は続いていたようである。したがって『週報』の原稿作成の一部は現場作業と並行して行われていたのであろう。

7．『週報』の貨幣の項で員数を「イ　永楽通宝　完形１、残欠１、形２」とするが、「形」はおそらく同音の「計」の誤植で、計２点という意味であろう。

8．『週報』の日誌から拾い出すと、現場作業に従事

した期間が最も長いのは平井孝一で、次が川戸になる。ほかに発掘も含めて草刈り・撮影・墳丘実測などに白石竹雄・岡川宏道・鈴木道之助・須田勉らの名前がみえる。職名は川戸彰が副班長、それ以外の岡川を除いてが調査員となり、統括する班長が玉口時雄になる（鈴木 2006）。なお当該年度中に図面等の基礎整理を岡川・平井の両名が行っている。

9．記述中に遺構として判断するにあたって、平面図・断面図から検討したということなので、原図は作図されていたはずだが、未見である。

10. 足立 2011では出土状況を「経筒は塚の頂部10cm下から筒身を上にした状態で出土した」とする。筒身と台座しか残っていなかったので、立った状態の出土状況をいっているのであろうか。「10cm」という数字は、引用文献にあげている『週報』にしか見えないので、『週報』を参考にした記述と思うが、『週報』に「筒身を上にした状態」という記述はない。なお注４でも触れたように、当時の記録写真のなかには経筒を立てて撮影したものもある。

11. ほかに引用されている文献から計測値を記載しておく。川戸 1990では総高10.5cm、厚さ約0.8mm、筒身高9.9cm、一面幅2.4cm、下部構造については高さ0.9cm、径8.2cmとする。足立 2011では身高10.4cm、身幅4.7cm、身厚１mm、底高0.9cm、底幅7.8cmとする。また鳴田 1994は『週報』の数値を引用しているようである。

12. 保存処理は千葉県立房総風土記の丘資料館で平成５年度に㈱東都文化財保存研究所によって実施されている。事前の現状確認の所見にも紙に関する記載はなく、処理前の現状写真をみてもとくに紙の痕跡は視認できない。保存処理に出す前に紙はすでに取り除かれていたのであろう。なお田代孝は上蔵原経塚出土の天文21（1552）年の銘がある経筒の蓋と筒身内側に紙本経の残片が付着していた事例を報告している（田代 1995）。

13. ほかに広義の意味では六角宝幢式経筒に含まれる、享禄２（1529）年の年紀がある出土資料がある。それは栃木県聖山公園遺跡２号塚から出土した経筒で、高さ10.8cmで、側面が観音開きになり、扉の内側と筒裏面に銘文を刻む。１枚の銅板から六角形に折り曲げて筒状にしたものとは異なり、扉がつくことで小厨子のような形態になる。銘文は享禄２年２月に土州（高知県）の廻国聖賢正が奉納したことを刻む（三宅 2016）。

14. 説話に登場するものとしては、『三國傳記』巻十一21に「相模阿闍梨快賢」がみえる（平 1965・坪井 2006）。また鎌倉時代前期に高僧あるいは修験僧ともいう快賢が奥州での巡歴の途中、岩手県中部の大迫郷（花巻市）に立ち寄り、東根（子）嶽にある「開慶水」にちなんで山を早池峰（峯）山と命名したという伝承にその名が伝わっている（眞瀧村誌復刻刊行委 2003・矢羽々 2007ほか）。

15. 弥勒寺現住職の金森光瑞師からの私信によれば、この棟札が当弥勒寺の堂宇のものなのか、旧南禅寺（弥勒寺南方約250mの地点の八斗山北麓にあった寺院）の堂宇のものなのか判別できなかったとのことである。

16. 大正新脩大藏經テキストデータベースによる。

17. 高野山の僧侶が埋納した経筒としては、島根県大田市南八幡宮の鉄塔に納められたものが知られている（近藤 1965）。№123の逆修に伴う経筒で、紀年は天文15（1546）年正月で、僧名には高野山住舛賢とみえる。

引用・参考文献

赤松宗旦 1978『利根川図志』巻５　崙書房

足立順司　2011「廻国聖の道（三）－房総を歩く－」『経塚考古学論攷』岩田書院

天野　努 1998「公津原遺跡群」『千葉県の歴史　資料編　考古３（奈良・平安時代）』千葉県

安藤孝一 2011「古墳の墳丘上に営まれた経塚－伊豆国西岩崎経塚・願塚古墳」『経塚考古学論攷』岩田書院

猪川和子 1960「吉祥天彫像」『美術研究』210 美術研究所

石橋一展 2015「下総千葉氏関連資料」『下總千葉氏　シリーズ・中世関東武士の研究』第17巻 戎光祥出版株式会社

伊藤一男 1986「中世後期の成田地方」『成田市史　中世・近世編』成田市

今泉　潔 1997『千葉県重要古墳群測量調査報告書－成田市公津原古墳群－』千葉県教育委員会

大久保正 1999「契沖」『国史大辞典』巻５巻　吉川弘文館

大田幸博ほか 1987「中世寺院跡・神社・堂宇について」『奥野城跡－主要地方道「錦－湯前線」改良工事に伴う埋蔵文化財調査』熊本県教育委員会

大野政治 1986「中世成田の社寺と文化」『成田市史　中世・近世編』成田市

川戸　彰 1990「房総の経塚について－その１ 古代・中世資料の紹介－」『市原地方史研究 』16号　市原市教育委員会

木内達彦 1998「東和田城跡」『千葉県の歴史 資料編 中世１ 考古資料』千葉県

木村　修 1983「内藤泰夫氏所蔵「千葉氏の高野山宿望関係文書」『成田市史研究』第８号　成田市史編さん委員会編集　成田市
木村　修 1995「千葉県および房総関係の経塚」『千葉文華』30号 千葉県文化財保護協会
木村　修 1998「天王船塚11号墳経塚」『千葉県の歴史 資料編 中世１ 考古資料』千葉県
工藤英行 1978「川栗台古墳群発掘調査報告（１）－塚の調査」『成田市の文化財』第10輯　成田市教育委員会
栗田則久 2016『印旛沼に栄えた文化　公津原再発見－成田ニュータウンの遺跡展－』（公財）千葉県教育振興財団
小嶋博巳 2016「国を分ける行基－『日本回国六十六部縁起』の一節に関する覚書－」『清心語文』18 ノートルダム清心女子大学日本語日本文学会
小林尚人 2010『麺類の歴史をたずねて－わが国の粉食文化は麺類ではじまる－』特別ゼミナール「寺方そば研究会」学習メモ　寺方そば研究会
五来　重 1977『増補　高野聖』角川選書79　角川書店
近藤　正 1965「大田市南八幡宮の鉄塔と経筒について」『島根県文化財調査報告書』第１集　島根県教育委員会
（財）千葉県都市公社 1970「ＴＦ11号経塚調査経過報告」『週報』70号
白石竹雄ほか 1981『公津原Ⅱ』千葉県教育委員会・（財）千葉県文化財センター
鈴木公雄 1993「渡来銭から古寛永通宝へ－出土六道銭からみた近世前期銭貨流通史の復元－」『論苑考古学』坪井清足さんの古稀を祝う会編　天山社
鈴木武次 2006『苦闘の日々 文化財の調査と保護と－日記抄』
関　秀夫 1985「中世的な経塚」『経塚』考古学ライブラリー33 ニュー・サイエンス社
関　秀夫 1987「六十六部聖による納経塚」『経塚－関東とその周辺－』東京国立博物館
関　秀夫 1988『経塚遺文』株式会社東京堂出版
平　裕史 1965「遠州櫻ケ池譚私攷」『佛教大学研究紀要』47 佛教大学
高橋隆三・小泉宜右校訂 1977『経覚私要鈔』４　史料纂集古記録編　続群書類従完成会
高森良文 1993「千葉県銚子市岡野台町出土の建長銘経筒について」『千葉県立大利根博物館研究報告』第５号 千葉県立大利根博物館
田代　孝 1995「中世六十六部聖の奉納経筒について」『山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター研究紀要』11　山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
田代　孝 2003「六十六部回国納経の発生と展開」『六十六部回国巡礼の諸相』岩田書院
千葉県 2003「49 内藤泰夫氏所蔵文書」『千葉県の歴史　資料編 中世４（県外文書１）』千葉県
千葉県企業庁 1975『公津原』
千葉県教育委員会 1978『千葉県埋蔵文化財包蔵地等一覧』
坪井直子 2006「龍神になった皇円－孝行集と法然上人伝－」『佛教大学総合研究所紀要別冊－浄土教典籍の研究』佛教大学総合研究所
寺尾英智 2007「高野山・伊勢信仰と廻国聖」『千葉県の歴史 通史編　中世』県史シリーズ３ 千葉県
中井真孝 1992「壬生寺」『国史大辞典』第13巻　吉川弘文館
中野晴久 2013「編年研究と生産地の変遷」『中世常滑窯の研究』愛知学院大学
鳴田浩司 1994「信仰と塚・経筒」『歴史時代（２）　房総考古学ライブラリー８』(財)千葉県文化財センター
野地秀俊 1998「「社僧」再考－中世祇園社における門閥形成－」『佛教大学大学院紀要』第26号
塙保己一 1997『群書系図部集 7』続群書類従完成会
浜田全真 1971「良忍上人と鞍馬寺」『印度學佛教學研究』Vol. 20 No.1 (1971-1972) 日本印度学仏教学会
正木　晃 1994「快賢」『朝日本歴史人物事典』朝日新聞社
眞瀧村誌復刻刊行委員会 2003『復刻　眞瀧村誌』
松長有慶 2014「高野山の歴史」『高野山』岩波新書1508　岩波書店
松本俊吉 1981「弥勒寺－ふるさとを行く」『奈良新聞』昭和56年8月10日刊
丸島和洋 2008「戦国期信濃伴野氏の基礎的考察」『信濃』第60巻第10号　信濃史学会
三浦和信ほか 1976『吉高家老地遺跡－弥生・土師集落址の調査－』吉高家老地遺跡調査会
三宅　慶 2016「経塚の概要」『経塚の諸相』立正大学博物館第10回特別展　立正大学博物館
三宅敏之 1968「六角宝幢形経筒について」『東京国立博物館紀要』４　東京国立博物館
村上弘子ａ2009「高野山における聖方の成立」『高野山信仰の成立と展開』吉川弘文館
村上弘子ｂ2009「供養帳にみる高野山信仰の展開」『高野山信仰の成立と展開』吉川弘文館
矢羽々文一郎 2007「〈早池峰開山1200年〉１　名称のいわれ」『盛岡タイムス』2007年５月14日付け
山中敏史 2003「建物基部構造の種類」『古代の官衙遺跡　Ⅰ 遺構編』独立行政法人 文化財研究所 奈良文化財研究所
山本哲也 1992『文脇遺跡』（財）君津郡市文化財センター
鷲尾順敬 1992「契沖」『増訂・日本仏家人名辞書』東京美術